

舞台美術から展開する現代舞踊作品の構想と試作—地域協働による現代舞踊作品制作の在り方・国民文化祭おかやま 2010「洋舞フェスティバル」上演作品について—

新山順子 (岡山県立大学)

岡本悦子 (就実大学)

I. 研究目的

本研究は、第25回国民文化祭おかやま2010「洋舞フェスティバル」(2010年11月;倉敷市市民会館)で上演された現代舞踊作品「COCOON」の制作過程を整理・再考し、地域協働による現代舞踊作品制作の在り方を検討するものである。筆者らは、国民文化祭のために立ち上げられた岡山県現代舞踊連盟の会員として、2002年より国民文化祭のための準備を始めた。組織作りから始めて上演まで8年の歳月を費やしている。本研究で取り上げるのは、制作の中で最も重要と考えられる作品構想と試作の部分である。

II. 研究方法

作品「COCOON」の構想と試作について、資料(岡山県現代舞踊連盟の記録、プログラム、映像)に基づき検討する。作品構想と試作に費やした具体的な期間としては、2009年4月から2010年3月である。また作品構想と関連するため岡山県現代舞踊連盟の成り立ちや「洋舞フェスティバル」の概要等も加えながら考察する。

III. 結果及び考察

1. 「洋舞フェスティバル」を支える連盟組織

岡山県現代舞踊連盟(以下、現代舞踊連盟と略す)は岡山県からの依頼により国民文化祭を担うことを使命として2002年に立ち上げられた。会員は、岡山県内の舞踊家、舞踊を専門とする教員、学生団体等、多種多様な構成である。国民文化祭における舞踊公演のもち方は地域の実情により様々であるが、岡山県では、財政面組織面の様々な実情を鑑みて、早くから現代舞踊とバレエ合同の「洋舞フェスティバル」という形で舞踊公演を開催する方向に決まっていた。

2. 地域性を反映する作品の主題

国民文化祭では、開催県の舞踊連盟が30分程度の柱となる作品を制作することが多い。またその作品の主題は、概ね開催県の地域性を反映したものを求められる。現代舞踊連盟では、「岡山らしさ」の掘り起こしを行い、岡山県の自然景観、行事、伝説、特産品等、様々な主題の可能性を協議した。しかし、今回の作品制作では「岡山らしさ」以上に「現代舞踊だからこそできること」も重要であると考えていた。

3. 舞台美術から展開する作品の構想

現代舞踊作品は動きや構成に決まりがないため、様々なモノとのコラボレーションに挑戦すること

が可能である。2009年の春、岡山在住の造形作家・島田清徳氏のテキスタイルアート作品(作品名「遠との共鳴」)に出会い、この壮大な美しい作品を舞台美術に使用させていただく可能性が拓けた。そして、この舞台美術から主題を構想するという発想に考え方を転換させた。幾重にも折り重なった白い布の襞が印象的なアート作品からどのような主題が展開できるか、さらに協議を重ねた。

4. 試演会の開催

2009年8月には振付家(現代舞踊連盟会員:平井優子氏)が決定し、これまでの経緯を引き継ぎながらも、これ以降は振付家自身が構想を練り「COCOON(コクーン)=繭」というイメージに辿り着いた。内なる世界(ふるさと)で何かが生み出されるという、抽象的幻想的な作品構想で、それゆえ新奇な試みにも挑戦できるものであった。その後、2010年1月には国民文化祭プレ公演(岡山市市民会館)で作品の一部を上演した。また制作途中であっても地域へ発信していくことが必要と考え、同年3月には就実大学体育館において、試演会とワークショップを開催した。この試演会とワークショップでは、テキスタイルアート作品を写真1のように初めて舞台に吊り込み、振付家がダンサーと舞台美術の関わりを考えながら動きを模索した。



写真1. 試演会の様子

IV. まとめ

今回の取り組みでは、新進の造形作家と振付家とのコラボレーションにより作品構想が柔軟に変化した点、2度の試作の公開により構想が具体化及び地域の関心を高めた点、等が特長である。国民文化祭の上演作品としては実験的でユニークな制作スタイルであったと考える。現代舞踊制作では、本番直前まで振付・演出に変更が加えられる場合が多い。制作が長期にわたる中、魅力的な“舞台美術=テキスタイルアート作品”が、ダンサーや制作に関わるスタッフにとって象徴的存在として共通イメージ保持やモチベーション維持に有効に機能したことも重要である。

(※本研究は平成21年度岡山県立大学地域貢献特別研究の一部である。)

地域から発信する現代舞踊の模索
— 国民文化祭おかやま 2010 を
めぐる岡山の事例より —

岡本悦子 (就実大学)
新山順子 (岡山県立大学)

I. 研究目的と方法

本研究の目的は、①現代舞踊の特性を国民文化祭(以下国文祭)にどう生かすか、②国文祭における岡山県現代舞踊連盟(以下連盟)の取り組みの特徴は何か、③国文祭遂行にあたって重要であったことは何かを明らかにすることである。

本研究では、地域社会に向けて創造的な身体表現の経験を拓いた企画の一つとして、連盟の国文祭主催事業への取り組みをとり上げ、企画運営総括に携わった実践と資料をもとに、その成果を検証し、今後の課題と展望に言及する。

II. 結果および考察

1. 国文祭における連盟の課題

21世紀に入って10年、地域でも一部では市民権を獲得しているとはいえ、未だ現代芸術、特に現代舞踊についての理解は一般的に十分とはいえない。古くから日本の東西と山陰・山陽、四国をつなぐ要所として発展し、気候にも恵まれた岡山では、伝統重視と中央志向の傾向が根強い。一方、1994年に始まった市民参加型の夏祭り「うらじゃ」には、今年、過去最高の6850名の踊り子が踊り、50万人近い観光客が県内外から訪れて楽しんだといわれる。街角の地下道にはストリートダンスの若者が毎夜大勢たむろしているが、いずれにしろ一般県民にとってはそれらの方がよりのなじみ深い現代的な舞踊と受け取られている印象は否めない。

連盟は、上記の現状を踏まえ、この国民的事業を契機に現代舞踊をどのように地域に拓き、活性化させるかを課題とした。

2. 国文祭における連盟の取り組み

個の内面に深く降りた抽象的な表現や実験的な新奇性は現代舞踊の魅力の一つであるが、同時に難解とされる点でもある。連盟はこの魅力を保ちつつ、鑑賞者に希望や夢を提起するテーマと方法を模索した。その結果、「祭典を共催するバレエ連盟作品(大原美術館モチーフ)とバランスを取り、普遍的にふるさとを描く」「魅力的な新奇性革新性をもつ振付・演出で、多様な身体の融合イメージを表現する」「開催地の利便性を最大に生かした総合的演出と多彩多数の出演者」という方向性を導きだした。

2-1 スペクタクルな演出への挑戦(巨大現代芸術作品とのコラボレーション)

具体的テーマ、振付家、コラボから導き出されたアートサーカスシーンの実現については共同研究者新山の「舞台芸術から展開する現代舞踊作品の構想と試作」に譲る。

2-2 振付・演出及び出演を意欲的な地元の若手表現者達に託す

地域が抱える最大の困難は、現代舞踊に携わる人口(舞踊家、指導者、生徒、別種職業が本務の愛好者、批評家等)の少なさにある。連盟は出演者を確保するために、会員に限らず、公募オーディションによって選抜することとした。我々は柔軟な発想と存在感のある身体表現力をもつ出演者を求めた。

オーディションの結果、会員や会員の生徒他、地域の大学生及び卒業生、2003年、2004年開催の市民参加型ダンス公演事業や2005年開催の国体式典演技に参加した県民ら(地元演劇人や舞踊愛好家)も再度参集し、出演者となった。

2-3 創作プロセスの開示による鑑賞眼の育成

振付家は出演者との対話を重視して創作した。出演者は振付家のイメージが形を成すプロセスに立ち会う経験を通して、鑑賞の目を養った。

2-4 現代舞踊のイメージ改善を図る工夫

連盟は2度地域へ向けて試作を公開し、プログラム等における解説や、報道取材への対応では、「とっつきにくい現代舞踊」という先入観を軽減できるよう努めた。

III. まとめ

岡山では、近年の国家的事業が評価を得、その後の次世代育成・地元発信ムードを背景に、行政等による現代舞踊支援体制の敷かれた企画が増加している。また表現者達も新たに所属を超えてつながり、その企画に応じる新たなグループが出現している。彼らが県外にも活動域を広げていることは成果といえよう。

しかし一方で、国文祭のために設立された連盟の会員数は、事後に半減した。会員の各自が表現者であったが、大組織体制下に敷かれた事務や交渉事の負担が重く、疲弊し、個々の稽古場運営や職務へ支障を来したことに因るものであろう。連盟は国文祭において舞台に精通したアートマネージメント役をもこなし、祭典を成功に導いたが、同時にそれは地域におけるアートマネージメント専門職の不在を再認識させられた経験でもあり、今後の課題としてあげられよう。

ダンサーの立場からみる「10年」間隔

ー海外活動キャリアをもつ日本人ダンサーの 声を手掛かりにー

三輪 亜希子 (名古屋女子大学短期大学部)・
平山 素子 (筑波大学)

1. はじめに

20世紀の舞踊は、19世紀末に誕生した自由で創造的なダンスの総称であり、100年という短期間に様々変化を遂げ、21世紀となって約10年が経過した今日もなおその実験的な道程は続いている。

「舞台はコレオグラファーの作品となった」(三浦, 1993, p. 10) と謳われるこの革新的な舞踊は、作品の主義・主張や上演形態、振付全てにおいて崩壊と再生を繰り返し、その名称も次々変化していった。

各時代の先導者、つまりコレオグラファーがそれまでの手法へ幾度となくアンチを唱え、崩れ、時代が変わり、そして多様化する方法論と共に豊かに展開してきたといえる。

こうした時代の流れの中で、特に20世紀から21世紀への移行期に近年のダンス界を盛りだてた「巨匠」と呼ばれるコレオグラファー等の名声は高く、彼等の下でミュージズのように踊り手として邁進した数少ないダンサーが存在する。

「巨匠」の下でダンサーとしての貴重な経験を積んだ彼等のそれは、一体どんな経験であったのか、ダンサーは日々何を感じ、何を考え、受け止めてきたのか。そして、21世紀の舞踊を歩み続ける中で未来に向けて何を求めているのか。

以上を前提に、筆者は20世紀の舞踊の繁栄に関してダンサーの捉え方に興味を抱き、コレオグラファーとの関係を中心としたインタビュー調査を行った。

対象としたダンサーは、20世紀の舞踊を支えた「巨匠」の下での貴重な経験をもつ日本人ダンサー12名である。

「巨匠」の下での体験記をもつダンサー達の声を集め、総じて考察していくという先行研究は見当たらず、それを試みたいということが目的である。

2. ダンサーの立場からみる「10年」間隔

本研究は、得られたインタビュー回答の一考察である。

「10年」という数字には明快な根拠が隠されているのではなく、ダンサーからの回答群に幾つかそれを示唆する内容が聞き取れたことと、ダンサーの感覚としてこの程度の長さが次の変革まで必要視されるのではないかという推測である。

ダンサーFから、「今は小さなプロジェクトで始めているようなカンパニーが10年後とかに大きく

なるのでは」という回答が得られ、彼の「現在はリサーチの途中」という言葉に代表されるように、少なくとも調査を行ったダンサーの大半はすぐに何かが出てくるということではないと現状を捉えていた。

過去への振り返りでは、コレオグラファーと過ごした刺激的で濃密な環境に対する敬意の言葉と20世紀の舞踊の盛大さを物語る言葉が多く聞きとれ、そこから独自の道を選ぶまでには10年前後の時間を必要としたという回答が幾つか挙がった。

そして、未来に関する回答の多くは「分からない」であり、実験を絶えず重ね「知的感動」を呼び起こす身体の出出を探し求めていく先に次のダンスを提案できる哲学も見えてくるのではないかという内容を示す言葉が幾つか得られた。

しかし、「巨匠」も同様に、その功績の確立には10数年という長い歴史が隠されているのは周知の事実であろう。

現代ダンスの面白みは、他と異なる提案をすることにあるという見方も一つであり、これまでコレオグラファーが「どのように作るのか」独自のスタイルを提案すべく邁進してきたように、ダンサーとしての実験を続け10年程度の長期の時間をかけて切り開かれたものが新たな過去を作り出して舞踊は継承されていくのではないか。

本研究を通して上記のような考察に至った。

そして、コンテンポラリーダンスという名称が台頭して20年強が経つこの時期に、そろそろ名称の変化が起きる大きな改革時期が訪れることを期待する声もあるだろうが、今は実験の方向性が演出や方法論よりも、身体の内部分を見つめるような非常にミニマムなこだわりへと移っていることも現代の特徴であり、そのために変化が見出しにくいという事も考え得るのではないだろうか。

表1 調査対象者の概要

ダンサー名	聞き取り対象のコレオグラファー	カンパニー名(国名)	カンパニー所属期
ダンサーA	ピナ・バウシュ	ヴッパタール舞踊団(ドイツ)	1982-1998
ダンサーB	グレゴ・ゼーリン	オスナブルック市立劇場(ドイツ)	2002-2005
ダンサーC	オハッド・ナハリ	バットシェバ舞踊団(イスラエル)	1997-2007
ダンサーD	ウヴェ・ショルツ	ライブ・ツイヒ舞踊団(ドイツ)	1998-2008
ダンサーE	ジャン・クロード・ガロッタ	グルノーブル文化センター(フランス)	2001-2007
ダンサーF	イリ・キリアン	NDT(オランダ)	2003-2009
ダンサーG	マース・カニングハム	カニングハム舞踊団(アメリカ)	1998-2009
ダンサーH	イリ・キリアン	NDT(オランダ)	1991-1999
ダンサーI	ヨハン・インガー	クルベリー・バレエ団(スウェーデン)	2007-
ダンサーJ	オハッド・ナハリ	バットシェバ舞踊団(イスラエル)	1997-2009
ダンサーK	ピナ・バウシュ	ヴッパタール舞踊団(ドイツ)	2000-
ダンサーL	アンヌ=テレサ・ド・ケースマイケル	ローザス(ベルギー)	1994-1997

・三浦雅士(1993) 舞踊、炎える焦点. 季刊アート・エクスプレス No. 1, 新書館, 東京: 10

子どもたちのコミュニケーション能力を育むためにアーティストができること～「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」におけるダンス分野の取組～

高橋るみ子 (宮崎大学)

児玉孝文 (NPO 法人 MIYAZAKI C-DANCE CENTER)

1. はじめに

NPO 法人や劇場等に所属する芸術家を学校へ派遣し、その芸術家と教師が連携して国語、社会、体育、音楽、総合的な学習の時間、特別活動などの授業に芸術表現体験活動を効果的に結び付けたワークショップ型の授業を実施する取組が、文部科学省「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」(以下、「新事業」と言う。)である。2年目となる平成23年度も、全国25都道府県83校(別に団体申請分89校)が採択されている。実施分野は、ダンス(2校)、演劇(63校)、メディア芸術(10校)、音楽(4校)、太鼓・人形劇・美術・映像(各1校)など多岐にわたる。

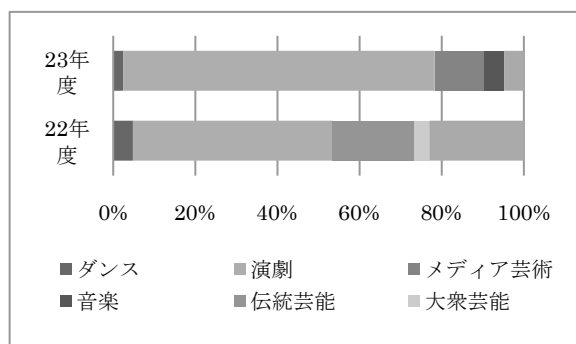


図1 分野別実施状況 (作図: 高橋, 出典: コミュニケーション教育普及協議会関係資料, 2011)

今大会は、新事業の実態と併せて、今年度の開催校(学校申請分)のうち、唯一ダンスで実施する宮崎大学教育文化学部附属学校の取組(小中一貫教育研究)について分析・報告する。

2. 新事業の特色と効果

「コミュニケーション教育推進会議審議経過報告(案)」(文部科学省, 2011)では、新事業の特色を、次ように集約している。

- ①グループ単位で協働して、正解のない課題に創造的・創作的に取り組む活動を中心とするワークショップ型の手法をとること。
- ②演劇的活動などの表現手法を豊富に取り入れていること。
- ③ワークショップの理論や手法を備えた芸術家等の学部講師が授業に参画すること。

また、こうした取組を実践したことによって、子どもたちに次のような効果を認めることができる、と報告している。

- ・他者認識や自己認識の力が向上する。
- ・身体表現等を用いて相互に伝え合うことの喜びに気づき、「伝える力」が向上する。
- ・自己肯定感と自信の醸成がなされる。
- ・学級の雰囲気改善されて、学級全体の学力が向上する。
- ・いじめや不登校、暴力行為などの問題解決にもつながる。

3. 芸術家等に対する要望

今年8月に開催された「コミュニケーション教育普及協議会～コミュニケーション教育・フェスタ～」(文部科学省)において、平成22年度の開催校に実施したアンケート結果が報告された。その結果から芸術家等に対する要望を探った。

<開催校>めざすところが学校側と芸術家との間にずれがあった。学校の現状を理解してほしい。当初の予定とは講師も内容も変更になった。全体の場での言葉づかいに注意してほしい。ゆっくりわかるように話してほしい。悪い意味で目立っている生徒にはその場で積極的に注意や指導をしてほしい。◎芸術家の表現を児童に見せる場面を作ってほしい。

<教育委員会>当初の計画の予算内で、学校のできる範囲で実施できるようにしてほしい。

<児童・生徒>知らない人(芸術家)と話づらい。自分に役立つものではなかった。◎たくさん考えてやったのに、プロの人に「こうした方がよい」と言われて批判されたのが嫌だった。

4. アーティストができること

附属小学校、同中学校へは、大学の舞踊学研究室が立ち上げたアートNPO法人に所属するアーティスト(んまつーポス)を派遣し、体育の授業にコンテンポラリーダンスの体験活動を効果的に結び付けたワークショップ型の授業を実施する。回数は、前者が3クラス×4回、後者が4クラス×3回のそれぞれ12回である。具体的には、前述の新事業の特色及び芸術家に対する要望を踏まえ、「導入」「展開」「ふりかえり」を意識的に組み込んだプログラムとし、主となる展開の場面では、活動の過程(創作やグループでの話し合い等)を重視する中で、ファシリテーターとしての専門力と、クリエイターとしての専門力を活かすようにする。実施に当たっては、教員との事前事後の打ち合わせの時間を確保し、教員と学習のねらいや目標とそのため手法などを共有し、授業における役割分担を確認する。

5. おわりに

今回の報告により、体育や総合的な学習の時間、特別活動における新事業(ダンス・舞踊分野)の取組が増加することを期待したい。なお平成24年の1月に実施する附属中の実践については、小中一貫教育研究としてまとめ、後日報告する。

福島県郡山市の林間学校におけるダンス活動の意義と課題

弓削田 綾乃 (早稲田大学)

竹内 エリカ (一般財団法人日本キッズ
コーチング協会)

1. はじめに

3月の東京電力第一原子力発電所の事故を受けて、屋外活動を制限されている地域は広範囲にわたる。その一地域である福島県郡山市では、教育委員会主導のもと、児童の夏季林間学校が市内で開催され、短時間のダンス教室が組み込まれた。この実験的なダンス活動を対象として、現状と行政の取り組み、子どもたちの反応と成果等を明らかにし、被災地での意義と課題を検討する。

2. 郡山市湖南林間学校の概要と子どもたちがおかれた現状

2011年7月30日から8月10日の間、3回に分けて、児童と保護者約450名を対象とした「郡山市湖南林間学校～君の笑顔は郡山の希望 いっしょにあそぼう!」が開催された。主催は、郡山市や郡山市教育委員会等からなる「平成23年度郡山市湖南林間学校実行委員会」である。

目的は、屋外活動が制限されている子どもたちに、夏休みの宿泊体験を提供し、自然の中で安心して、思う存分、笑い・楽しみ・学ぶ機会を提供することである(郡山市教育委員会資料より)。内容は多岐にわたり、それらのプログラムの1つに、「楽しく体を動かそうダンス教室」があった。

開催背景として、市が指針を示した、屋外活動を1日3時間以内とする「3時間ルール」がある。そのため、屋外での運動機会が減り、長期的にみると、各発達段階で獲得すべき運動能力の欠如が懸念される。また、言葉での自己表現が未熟な子どもたちが、身体運動による自己表現・自己開放を存分にできないことも問題だろう。

また運動以外にも、いくつかの問題が指摘されている。家庭による対応の差や、度重なる風評被害などが、子どもたちの心に深刻な影響を与えているという。これらを受けて郡山市は、心の問題に対処するプロジェクトを始動させる一方で、運動機会を提供する市内林間学校や県外キャンプへの呼びかけなどをおこない、選択肢の充実に努めている。

3. ダンス教室が目指したもの

ダンス教室は、低学年グループと中・高学年グループとに別れて実施された。いずれも短時間だったため、リズムダンスをコーチが振り移して発

表する形式だった。

目指したのは、体幹を中心とした粗大運動によって心身を活性化し、自主性・積極性を引きだして自立と開放を支援することである。具体的には、子ども自らが、①動きを提案する、②舞台上でのダンス発表を希望することをゴールとした。そのために、活動を支援するコーチらは、次のことをあらかじめ決めていた。体幹中心の大きな動きを心がけ、左右均等の動きや、手足の細かい動きをなるべく入れないようにした。また、承認の言葉かけを多用する、子どもの創意を尊重する、数字のカウントをとらない(言葉で表現)などを統一していた。

4. 参加者の反応

「もう1回踊りたい」「次はいつ来るの?」「また来てね」等の感想からは、充実感・達成感が推測された。粗大運動を中心に実施したことにより、手足の細かい動きよりも、身体全体を動かすことが意識され、運動欲求に対する満足が高かったのではないと思われる。

また、時間の経過に伴い、「先生、みて」「できたよ」という要求や、「この振りはどう?」という提案、「前で踊りたい」という意欲の言葉が出るようになった。様々な場面で承認されたことで自信につながり、活動を通して心身の開放と積極性を養えたのではないかと考える。

例をあげると、前半は母親から離れられなかった低学年の子が、休憩時のコーチや仲間とのふれあいを経て、後半は子どもの輪に入り、ステージ発表をやり遂げた。自立の一步となったのではないだろうか。また、無表情で動きが小さかった中・高学年の男児が、コーチの働きかけによって、笑顔でいきいきと踊るようになった。ダンスで心の状態を推し量り、対応した結果の変化と考える。

5. おわりに

心身のストレスを引き起こす現状に対して、行政側は、環境を整え、イベント等の選択肢を用意して要望に応じている。しかし日常的な運動については、各校の判断に任せざるを得ない状況である。こうした日常的な運動を充実させるために、成長段階にあわせた屋内運動の奨励と環境整備が課題と考える。子どもたちの現状を踏まえると、心身の問題へ適切に対応するために、ダンスを含めた表現活動の活用を視野に入れる必要があるだろう。

また、「短期的支援よりも長期的支援を」との声に応え、単発的支援の継続による支援や、教育現場での人材育成への支援などが、肝要だと考える。